

mt style

M A G A Z I N E

What is mt?





What is mt?

mtってなんだろう。

はじまりは1冊の美しいミニブックとの出会いでした。
それはマスキングテープに魅せられた
3人の女性の手で作られたもの。
mtは暮らしを豊かにする誰かの想いから生まれました。

日本初のハイトリ紙からはじまり、
段ボールなどの梱包用粘着テープ、
車や建築の現場で使われる塗装用テープ、
そして文具や暮らし道具として誕生したマスキングテープmt。

これまで私たちのものづくりは、和紙+粘着の技術を活かし、
誰かの暮らしとともに歩んできました。
そんな「誰か」の声ではじまったmtの新たな取り組みや
商品開発をご紹介します。



INDEX

誰かとmt

- 01 mt casa paintable tape
- 02 mt mamowrap
- 03 kurashiki tape

mt NEXT 100

- 04 mt ex at KANAZAWA FOREST OF CREATION ART MUSEUM
- 05 collaboration workshop
- 06 mt upcycle workshop
- 07 banner bag
- 08 workshop & gift wrapping

mt × shop wrapping

- 09 takenoto ohagi
- 10 SARUTAHIKO COFFEE
- 11 Melissa



誰かとmt

粘着技術 × ユーザーニーズから
生まれた新しいmt

「やりたい」をかなえる！
タカラ塗料と開発した
ペイントブルテープで広がる喜び。

01.

タカラ塗料

大野一馬さん

小さなきっかけから、互いのアイデアと技術が融合し、新しい商品が生まれることがあります。ペンキが塗れる塗装下地用マスキングテープ「ペイントブルテープ」の商品開発はタカラ塗料さんとの出会いから始まりました。

タカラ塗料の代表、大野さんとお会いしたのは2023年2月。カモ井加工紙(以下、カモ井)のWEBサイト内に「職人図鑑」という職人紹介コーナーがあり、大阪でタカラ塗料の社員の方に取材をさせていただいたことがきっかけでした。なんとその数カ月後にはタカラ塗料と共同開発した商品「ペイントブルテープ」が誕生するというスピーディな展開となったんです。出会

いの場面を大野さんが振り返ります。

「商品開発のきっかけは、カモ井の皆さんが来社された際の雑談なんです。僕はもともと小さなマスキングテープを壁に貼って、その上から塗装して色具合を見るということをしていました、この大きい版があればいいなと漠然と思っていたんですね。

また、工作をするときにガムテープの部分にはペンキがきれいに塗れないけれど、マスキングテープだと上からしっかり塗れるな、ということも前々から思っていました。そういったこともあり、『マスキングテープって、切ったものが売られているけど、切らずにそのまま大きい状態のものがあるといいのでは』と、その場でパッと思いついたんです。



壁に貼って、上から塗料を塗ることで気軽に壁の色を変えられます。
失敗したら剥がせ、原状回復も可能です。
mt casa paintable tape 300mm×40m / 税込 ¥4,455
100mm×40m / 税込 ¥1,518

そしたら、カモ井専務の谷口さんが『できま
すよ』と。大きいテープを壁に貼って、その上か
らペンキを塗れば壁の色を変えるアイテムとし
て使えるのではないかと話が進み、その
後、すぐにサンプルを送ってくださったんです。
うちでいろいろ実験したら、ノリの強さとか、紙
の薄さとか、マスキングテープにもいろんな種
類があるんだなと気づきましたね」

いつも塗装の現場のそばにあったはずのマ
スキングテープ。しかし、その上に何かを塗ると
いう目的の商品は開発したことがありませんで
した。谷口も当時のことを振り返ります。
「マスキングテープは養生するためのテープで
あって、下地として下に潜らせるなんて発想は
なかったですね。ただ、塗料が密着するという
のはマスキングテープのためには大事なことで
すので、その技術はありました。たまたま大野さ
んとそういう話になりましたので、紫色の原反
をワイドにカットしたものを、『これでテストし
てください』とお渡ししたんです」

お渡しした幅広のマスキングテープを早速
試してくださった大野さん。「下地にするには
色が濃すぎる」という問題に気づき、谷口に相
談します。
「大野さんから、紫色の上に薄い色の塗料を

塗ったら、下の紫が見えてしまうと言われまし
て。もともとマスキングテープは『養生として使
い、最後に外すテープ』というイメージでしたか
ら、どれもわりと派手な色なんです。じゃあ白に
しましょうか、という話になったのですが、これ
もまた大野さんのアイデアで、『壁の色が白い
家が多いため、白だと貼れている範囲がわか
らず、塗料がはみ出してしまう可能性がある』と
いうことで、薄いグレーにしてはどうかという話
になりました」

白の塗料を塗っても下地のグレーが見えな
いギリギリの色合いを探すために大野さんも
実験を繰り返し、その結果、かなり薄めのグレ
ーを採用することになりました。その後も話はス
ピーディに進み、最初の出会いからわずか7カ
月後、2023年9月には「ペイントブルテープ」の
発売に至りました。

商品化するにあたっては技術的に難しい
面もあった、と開発に携わったカモ井の山下
が振り返ります。
「やはり普通のマスキングテープと大きく違
うのが幅の広さです。幅広になるぶん重くなる
ので、ロールからきれいに剥がせなくなってし
まって。巻き出しの力を工夫したことと、粘着
力と剥離のバランスをコントロールしたことが

設計の際に最も苦労した点ですね」

これまでに培った技術で完成したペイントブ
ルテープ。大野さんはこのアイテムを使って、日
本のインテリアに対する意識を変えていきたい
と語ります。

「長年思っていたことなのですが、塗料という
と日本では男性っぽいイメージがあると思うん
です。海外では女性がメインターゲットで、壁の
色を気軽に変えたり、インテリアを楽しんだりす
るために塗料が使われています。そういう文化
を日本でも広めたいなと思っています。

『壁の色を変えたいけど、うちは賃貸なんで
す』という言葉をよく聞きます。また、持ち家でも
壁を汚さずキープしたい、という方も多いので
すが、そういった方たちの背中を押して、『やり
たい気持ち』を支えられるのが、このペイントブ
ルテープです」

実際に使われたお客さまからの反応もすご
くいんです、と大野さん。

「特に絵を描く人にはとても喜ばれますね。工
事現場で使うような仮囲いにペイントブルテー
プを貼って絵を描いたという方がいたり、アート
フェスティバルで壁に絵を描く際に便利だっ
たという方がいたり。

また、ちょっとおもしろい使い方として、たと
えばふすまが破れていたら、そこにペイントブ
ルテープを貼って、上から塗るということもでき
ます。マイナスな部分をゼロにして、さらに楽しめ
るんです。現在は業者さんが多く買ってくださ
っている印象がありますが、今後は一般の方にも
広げていきたいですし、学校や幼稚園など
でも使っていただきたいですね」

実際にmtのイベントでも思いきり落書きが
できるコーナーとしてペイントブルテープを設置
したところ、お子さんたちが喜んで描いてくれ
ました。その話をすると、大野さんがこんな話を
してくれました。

「そういう場で、『好きに描いていいよ』と言
われたら、みんなわりと小さめに絵を描きます
よね(笑)。それは大きく描く習慣がないからで、
大きなところに描くというトレーニングをする
と、描けるようになるらしいです。そういう意味
でもアート活動にどんどん利用してほしいです
ね。

そしてもちろん、日常生活でも楽しんでほし
いです。インテリア用品ってたくさんありますが、
皆さん『壁の色を変えられない』という前提が
あるんですね。だから意外とインテリアの幅が
少ない。派手な色の家具を置きたくても、白い
壁の前だと浮く場合がありますから。でも、壁
の色が変えられると家具の色も冒険ができま
す。生活を楽しむという気持ちで、いろいろと試
してもらえたら嬉しいですよ」

育児をもっと愛しい時間に。
「問い合わせ」から生まれた交流と、
mt DRAP、mtまもラップの可能性。

02.

モーモ

教来石小織さん

カモ井がものづくりにおいて大切にしているのは、使ってくださる方々の思いに真摯に向き合うこと。商品を愛用して下さっている、お母さんの声もその1つです。

モーモとカモ井の交流は、教来石さんからご連絡をいただいたことから始まりました。モーモは教来石さんが友人の漫画家・松本ひで吉さんと一緒に立ち上げた会社です。そのきっかけは二人に子どもが生まれ、育児の時間の貴重さを実感したからだと言います。

「子育てはとても大変ですけど、その時間は後から振り返ると短いものだと思いますし、貴重な年月を少しでも楽しく過ごせるお手伝いができる会社を作りたいと思ったんです。販売する商品について考えている中で、マスキングテープという工業用のテープにビニールがついたアイテムが離乳食の食べこぼし防止にいいらしいと友人が言っていて、それなら育児用にもっとかわいいデザインのものがあったらいいなと盛り上がったんです。最初にマスキングテープを作っている会社にお問い合わせしたところ、最低ロット数の問題があり私たちには手が出ませんでした。

そうしたらその会社の方が『岡山にあるカモ井加工紙さんならお話を聞いてくださるかもしれない』と教えてくださったんです。ご連絡したところ、すごく温かいお返事があり、オンラインミーティングをセットしてくれました。そして……衝撃的だったのですが、私たちが思い描き、提案させていただいた商品がすでにカモ井さんと販売されていたんです。WEBサイトは



見ていたものの、調べ切れないままご連絡してしまい、失礼なことをしてしまったと思いましたね。でもカモ井さんは商品のサンプルまで送ってくださったんです」

その商品とは「mt DRAP」。テープとフィルムや紙を一体化した商品で、お子さんの食べこぼし防止だけでなく、レジャーシーンなどでも使えます。サンプルを受け取った教来石さんたちは、すぐにその使用感のよさに気づいたと言います。

「他社のものに比べ、ビニールの厚みや粘着力などの質の高さが違いました。すばらしいなと思いましたし、どこの馬の骨ともわからない人間からの問い合わせにも真摯に向き合ってください、本当にカモ井さんのファンになってしまいました(笑)。

また、mt DRAPの中でも特にマットブラックが気に入っています。以前『移動映画館』の活動をしていたのですが、窓に貼ることで暗闇が作れてすごく便利でした。また、弟の子どもが0歳なのですが、寝かしつけの際に部屋を暗くしたいときに使っていると言っていましたね」

その後、カモ井は子育てのシーンでもより広く使える「mtまもラップ」も2024年11月に発売。机や床など汚したくない場所に貼れる幅広タイ

プのマスキングテープです。教来石さんたちもすぐに試してくださいました。

「mtまもラップは全面がぴったりくっつくので子どもがずらしてしまうこともありません。使う方の状況を最大限に想像したものづくりをされていることにとっても感動しました。私たちは今、育児手帳の開発を考えているのですが、手帳はマスキングテープとの相性もいいですし、カモ井さんといつか何かの形で一緒にできればと思います」



mt DRAPは屋外でのレジャーシートやペットのレインコートとしても使えます。お子さんの食べこぼし防止や、ヘアカット時のケープ代わりにも。
mt DRAP 550mm×10 m / 税込 ¥726



紙製なので直接「書ける」アイテムとしても使えるmtまもラップ。食事の際の汚れ防止にも。mtまもラップカッター箱入 / 税込 ¥2,145、mtまもラップカッター詰め替え用 200mm×7 m / 税込 ¥748

「倉敷テープ」開発秘話。
災害時に役立つアイテムに。
培った知見・技術が、

03. 倉敷市消防局 古波千秋さん

カモ井の技術を集結した、社会を支える新しいアイテムが続々と生まれています。災害時の捜索活動などに使用される「倉敷テープ」について話をうかがいました。

倉敷テープが生まれるきっかけになったのは、2018年に起きた西日本豪雨(平成30年7月豪雨)でした。倉敷市の真備町では大規模な浸水被害が発生。水が引いた後も、行方不明者が多数いたため、警察・自衛隊と連携して捜索活動が行われました。「建物等の捜索が完了した場合、完了したことを示すマーキングを行うのですが、警察・自衛隊との調整がうまくいかず、何度も同じ建物を捜索してしまう状況が発生しました。災害を振り返ったときに、現場の隊員から誰もが使いやすいマーキングができないかと声があがり、倉敷市消防局から地元の企業であるカモ井さんに相談させていただきました」

そうして2021年に開発された第1弾のテープは、2022年一般財団法人全国消防協会が開催する「消防機器の改良及び開発並びに消防に関する論文」において会長賞を受賞。倉敷市消防局の古波さんもここから参画することになります。「第1弾のテープを開発した頃、私は外部の機関に出向していました。帰任し、テープを見たとき、『これはすごくいい。改良したら全国の消防本部で使えるものになる』と直感的に感じました。

捜索完了時のマーキングに関しては、2014年

4月に総務省消防庁からの通知で示されていたのですが、スプレーで建物等に直接書き込むことを基本としています。簡易性に欠け、直接書き込めば建物等に損害を与えてしまうことにもなりますし、被災者の心情を考えると使いづらいなどの課題があります。マスキングテープの『貼って剥がせる』という特徴は、建物を傷めず、捜索活動時に最適です」

全国で使えるテープにするため、古波さんはさらにカモ井に相談をします。それは、手でちぎりやすいようにミシン目をつけること、そして手袋をしたままでも剥がしやすいようにノリづけていない部分を加えてほしい、というものでした。「ダメもとでカモ井さんにオーダーしたのですが、しっかり実現していただきました。おかげで使いやすさが圧倒的に向上しました」

古波さんは、カモ井との改良調整と並行して、岡山県内のすべての消防本部に自ら出向き、県内の消防本部で改良したテープを统一的に配備することについて呼びかけを行いました。2022年11月、第2弾のテープが完成し、岡山県のすべての消防本部に配備され、使用が開始されました。

「その後、他県の消防本部にもサンプルをお送りしたところ、『購入したい』という声が多く寄せ

られました。最終的に市販化のきっかけになったのは、2024年1月に発生した能登半島地震です。石川県に緊急消防援助隊として出動した神奈川県相模原市消防局の隊員がこのテープを使ってくださいました。帰隊後、正式に導入したいということで直接カモ井さんに連絡がいき、そこから市販化につながりました」

ももとは工業用テープとして生まれたカモ井のマスキングテープ。長い歴史の中で培った粘着技術や紙質の選択などの知見・技術が詰まった倉敷テープは、災害時をはじめ、さまざまな場面で役立つアイテムとして今後も社会を支えていきます。



2022年に完成したテープ。ミシン目があってちぎりやすく、ノリづけていない部分があり、剥がしやすい。厚みがあってシワになりにくいのも特徴です。
倉敷テープ 115mm×15m (ラベルは1本に約100枚) / 税込 ¥2,200



mt NEXT 100

これから先の100年に向けた
廃材を活かし、新たな価値を生むプロジェクト





mt ex at KANAZ FOREST OF CREATION ART MUSEUM

マスキングテープの廃材を作品に。
 作品への興味を喚起することから、
 アップサイクルへの関心につなげたい。

04. イヤマデザイン 居山浩二さん

2024年6月、福井県あわら市の「金津創作の森美術館」にて、
 カモ井による期間限定イベント「mt ex展」を開催し、
 mtのアートディレクター、居山浩二さんによるインスタレーション作品を展示しました。

「金津創作の森」の中の、木々に囲まれた静かな美術館。光が差し込む空間に、高さ約4メートルの、圧倒的な存在感を放つカラフルな「山」が設置されました。

「これはなんだろう?」と、まず作品に興味を持ってもらい、アップサイクルへの関心につなげたい——そんな思いをこめて作品を制作して下さったのが、アートディレクターの居山さんです。そしてこの「山」には、マスキングテープの「ヘタ」と呼ばれる廃材が使われています。
 「この場所はカモ井さんが見つけてくださったんですが、立地が魅力的で、扉を開けると外の緑と空間が一体となる、とても気持ちのいい場所だったんです。天井高もあって広がりのある空間を活かすためにボリュームのあるものを置きたいと思ったとき、瞬時に頭の中に『山』が浮かびました」

マスキングテープは紙管に巻きつけた長いロール状の紙をカットして作られますが、その際に発生する両端の部分は「ヘタ」と呼ばれ、これまで廃棄されてきました(現在は「heta box」として販売するほか、工場見学の際のお土産としても配布しています)。居山さんがこの「ヘタ」を5万3千個以上も積み上げて作った「山」は、直径約8メートル、高さ約4メートルになりました。
 「そのスケール感に驚いてくださる方が多かった

のですが、本当はもっと大きくしたかったんです(笑)。まずは素直に楽しんでもらい、その先に各自が環境問題などに思いを向けるきっかけにしてもらえたらと思って制作しました」

そう話す居山さんは、ご自身も日常生活で環境問題を意識されているそうです。
 「と言っても、たいしたことはできていないのですが、たとえば過剰包装の商品を手にとらないようにするなど、生活の中で無駄が出ないように心がけてはいます。職業柄、すてきなパッケージを見るとつい手が伸びてしまうんですが、それらは廃棄することなく、資料として活用していますね」

今後も、概念にとらわれず環境問題を取り入れていきたいと居山さんは言います。
 「アップサイクルという言葉に縛られるあまり、楽しくないものを作っても仕方がないですし、一方的に理想を押しつけるのではなく、いろんな活動を通じて自然に共感してもらえるような形で協力できればと思っています」

また、居山さんは「ささいなことでも何か力になれば」と、mtが手がける災害復興支援のためのチャリティテープのデザインも続けてくださっています。

「カモ井さんからのお声がけで始めたのですが、通常商品のmtをデザインする時とは違う心持ちで取り組んでいます。被災された方々がつらい思いをされているのは当然ですが、それを見聞きする我々もつらい気持ちになりますし、みんなが少しでも気持ちが和らぐようなものをモチーフにしたいと常に思っています。その上で、その土地に思いを馳せられるようなわかりやすいデザインを心がけています。

避難所って味気ない場所ですよ。でも、間仕切り用のダンボールにmtが貼られていたり、伝言用のボードにもmtが使われていたりすると知って、心が引き締まる思いにもなりました。せっかく取り組むチャリティーなら、1本でもたくさん売れて現地に貢献できるようなテープをこれからも作り続けていきたいです」



こちらもヘタを使った作品。関心を持ってもらうきっかけになるよう、新鮮な印象を与えるアプローチをしたいと常に考えているそう。

つなぐ、閉じる、活かす。

「ものづくり館by YKK」とともに開催した、
廃材を再生させるワークショップ。

05.

ものづくり館 by YKK

高荷 剛さん

2024年秋、ファスナーやボタンなどのメーカーとして知られるYKK、「ユニクロ ヨドバシAKIBA店」とカモ井のコラボにより、アップサイクルをテーマにしたワークショップが開催されました。

衣服や和紙の廃材・端材を使った工作のワークショップ「廃材でギフトグッズを作ろう」。会場となった東京・秋葉原にある「ものづくり館by YKK」は、商品や企業の取り組みなどを地域の人に知ってもらうためにYKKが運営する、イベントおよびコミュニティスペースです。

ワークショップの参加費は100円で、ギフトバッグ、ギフトポーチ、ミニバスケット、シャカシャカキーホルダーから好きなものを選んで作れるという企画。材料として、YKKからはファスナーの廃材や樹脂製ボタン、共同開催をしたユニクロからはパンツの裾上げカットをした際に出る余り生地、カモ井からは和紙の端材とマスキングテープを提供しました。

イベント開催のきっかけは、YKKの商品企画開発担当・高荷さんからのご提案でした。

「もともと、ファスナーを顧客提案する際に使用されないサンプル素材が余っているのを見て、捨てるにはもったいないなと思っていたんです。そんなとき、ちょうど別の企画でコラボしていたユニクロさんから『パンツの裾を提供できます』とお聞きして。カモ井さんともファスナー柄のコラボマスキングテープを作らせていただいたことがあったので、一緒におもしろいものができるのではと思い、ご提案させていただきました。そういえば、マスキングテープもファスナーも『つなぐ』、『閉じる』もの……もともと役割が似ていたんですよね」

小学5年生以上を対象としたギフトバッグとギフトポーチ作りでは、参加者の皆さんが思い思いに、好みのデザインの和紙端材やジーンズの裾、ファスナー素材などを組み合わせてミシンで縫い付けていました。また、3歳以上なら誰でも参加できるミニバスケットとシャカシャカキーホルダー作りも子どもたちに好評でした。

「ミシンを使わず、素材をつなぎあわせてマスキングテープや樹脂ボタンでとめるだけ。小さな子どもでも簡単に作れるものがあって、とてもよかった

なと思いました。参加した方からは『楽しかった!』『また来たい!』という感想もいただき、嬉しかったですね。今後もぜひカモ井さんとのコラボ企画は続けていきたいです」

2015年にオープンし、ファスナーなど商品の魅力を伝えるだけでなく、ハンドクラフト文化やアップサイクルをテーマにしたイベントを多数開催してきた「ものづくり館by YKK」。これからのものづくり文化の展望をお聞きしました。

「たとえば弊社ではユニクロさんのファスナーリペアサービスのサポートもしているのですが、壊



子どもから大人まで、たくさんの方がハンドクラフトを楽しんでいました。

れたら直して着る、自分のものを最後まで使い切るというサステナブルな意識については、近年さらに高まってきているように感じます。また他人とは違う、自分だけのオリジナルデザインのものを持ちたいというムードも、若い世代を中心に広がってきているようです。ものづくり館で開催するイベントにも、地域の方が興味や関心を持って来てくださり、ありがたい限りです。環境のことを視野に入れたものづくりの文化は、これからさらに発展していくのではないのでしょうか」



和紙の端材やジーンズの裾、ファスナー素材などを自由に組み合わせたギフトバッグや、ビニールの中に廃材をつめるだけの簡単シャカシャカキーホルダーなど。

マスキングテープ製造の廃材で 子どもたちの遊び場を作る。

06. Dream Network Activity 川井知子さん

カモ井では創業100周年を機に、これからの100年に向けて、素材と丁寧に向き合い、お客さまにもものづくりの楽しみをお届けし、さらに幸せを循環させる活動として、廃材を活かし、新たな価値を生む「mt NEXT 100 project」をスタート。それらを活かした新しい試みとして Dream Network Activityがmt upcycle workshopの企画・プロデュースを担当しました。

「含浸という手法で染められた工業用のマスキングテープ原紙は、両面ともにカラフルで透明感があり、とってもかわいいんです。これらで子どもたちの遊び場を作りたい!という宿題をいただいて、イメージーションが掻き立てられました」

マスキングテープの製造工程で捨てられてしまう廃材を活かし、新たな価値を生むプロジェクト「mt NEXT 100 project」のアイテムを使ったエコなワークショップを岡山・アルネ津山にて開催しました。

廃材から生まれたmt heta box、和紙ラッピング、和紙パッキンを使って子どもと遊ぶアイデアをスペースいっぱいに詰め込みました。

「本当はお子さんに思いっきりおえかきや紙あそびをさせてあげたい。そんな思いをもった親御さん、先生はたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか?」

マスキングテープをカットする際に廃棄される端っこの「ヘタ」で積み木遊びをしたり、廃材の紙をカットした「和紙パッキン」のプールで身体を動かしたり。たくさん使ったり、思いっきりはしゃいでも大丈夫なので、子どもたちにも大好評。

「エコの観点から、マスキングテープの廃材以外のパーツも再利用できるものやテープの紙管など、できるだけ工場にあるものを活用しました。以前イベントで使った大きなオブジェや、品質チェックの際によけていたほとんど遜色のない商品など、工場の隅っこで廃棄するにはもったいなくて眠っていたアイテムがたくさん見つかり、今回できるだけ使用しました。

また、大人気だったのが、mt casa paintable tapeを貼った大きなかくがきコーナー。もともとはDIY向けに開発された商品でしたが、サインペンやクレヨンなどさまざまな画材で描けるので、子どもたちの創作パワーの発散にぴったり。おうち使いもおすすめです」

子どもたちにマスキングテープがどのように作られているかを伝えることができ、またおうちに帰っても活用できるmt NEXT 100シリーズを使った工作が楽しめる「学びのコーナー」も設置しました。

ここで遊んだ楽しい思い出とともに、マスキングテープができるまでの工程や素材の話、ものを大切にする気持ちを少しでも記憶に刻んでもらえたら嬉しいです。また次回どこかで開催できればと思います。



イベント時のバナーを再利用。
世界に一つだけのバッグが誕生。

07.

ルポア

林 周二さん

これまで国内外で開催してきたmt展では、会場を彩るために布製のバナー(垂れ幕)を使用してきました。カモ井ではこのバナーを再利用し、バッグや小物として仕立てる試みを始めています。

アップサイクルの1つとして取り組んでいるバナーバッグ制作。完成したバッグは「mt factory tour」で初めてお披露目しました。その後も異なるバナーを使って少しずつ制作を続け、東京・蔵前のmt lab.でもバナーバッグ展を開催。この取り組みに協力してくださっているのがルポアの皆さんです。CEOの林さんに、まずは会社についてお聞きしました。

「ルポアは1961年に香川県東部地区の地場産業である革手袋の製造メーカーとしてスタートしました。時代の流れとともに手袋製造に必要な技術を応用し、財布やカードケースなどの革製品を作るようになりました。現在はその繊細な手仕事を評価いただき、OEM・ODMという形で有名ブランドの革製品を製造したり、自社ブランドを全国展開しています」

バナーを再利用するという制作依頼を受けたとき、「素晴らしい案件だと思いました」と林さんは振り返ります。

「これまで展示会やフェアなどの会場で、アイキャッチとして重要な役割を担っているバナーを目にしてきましたが、恥ずかしながら会期後のバナーの行き先には無関心でした。ですが、バナーは雨風にさらされることを前提に作られており、丈夫で再利用にふさわしい素材だという

ことを教えていただいて、ハッとすると同時にすばらしい取り組みだと感じました。

お引き受けして実際に制作に取りかかると、できそうでできないの連続で、一筋縄ではいかなかったですね。素材が丈夫なのは良いのですが、言い換えるとそれはとても硬いということです。縫うことはできても折りたいポイントできれいに折れてくれず、目指している形になかなかどり着けませんでした。またバナーとしての役割を果たしているため、多少なりともシワや汚れがあります。美しく仕上げるためにバッグのどのパーツにどの部分の生地を持ってくるかということも苦労しました」

さまざまな試行錯誤を経て商品は完成。バナーをトートバッグ、ウェットティッシュポーチ、モバイルポーチ、アウトドアクッションなど続々とすてきなアイテムに生まれ変わらせてくださいました。

「普段、私どもが主に扱っている素材は革です。革製品は人類最古のアップサイクル品と言われており、食肉文化の副産物として革製品が存在しています。同様に、役目を終えてしまったバナーも捨てておしまいではなく、用途や形を変えてアップサイクルすることで唯一無二の新しい価値を創造できます。この点で共通点を感じましたね」



バナーからバッグ用に生地を切り出す際、その箇所によって色合いやデザインは異なり、一つとして同じものはありません。そうして完成したオリジナルの製品は、手に取ってくださったお客さまからも好評をいただいています。今後も、皆さんの暮らしを彩る手助けになるような形でアップサイクルへの取り組みを続けていきます。



イベントで使用していたバナー。しっかりとした素材で、水にも強いことが特長です。



アウトドアクッション。生地を切り取る場所によってまったく違うデザインが生まれます。

誰かを思って「包む」幸せな時間。

廃材を使ったラッピングルームを設置。

08.

Peeka-Booyah

十川 俊郎さん

世界の子ども服や雑貨を扱うお店「Peeka-Booyah(ピーカブーヤ)」では、普段からmtを使ってくださっているだけでなく、mtの廃材でワークショップも実施され、さらに新店舗に設置されたラッピングルームでも廃材を上手に使ってくださっています。

香川県高松市の瀬戸内海を臨むエリアに店舗を構え、自ら海外で買い付けた子ども服などを20年にわたり販売している十川さん。根底にあるのは「子どもたちやそのご家族に、世界のさまざまな価値観やものの見方を伝えたい」という思いです。

「祖母がデンマーク刺繍をやっていたんです。当時は知らなかったのですが、お店を始める際に北欧のものを扱うかどうか躊躇していたタイミングで偶然そのことを知り、背中を押してもらったような気持ちになりました。北欧のものを見たときに心が落ち着く感じがしていたのも、幼少期の景色の一部として心の深い部分に刻まれていたのだと納得しましたね。それと同様に、お店に来る子どもたちにも、長い時間をかけて世界の新しい視点を届けられたらいいなと思っています」

2023年10月には廃材を使ったワークショップを実施された十川さん。カモ井からはマスキングテープを作る際に発生する両端の部分「ヘタ」と、のり付けする前のワックスペーパーの端材などをご提供しました。

「2024年が辰年だったため『幻獣ワークショップ』と称してみんなで大きな龍のオブジェを作ったんです。当日は子どもたちがテープをちぎった



り貼ったりしながら作業を楽しんでくれ、約3メートルの大きな龍が完成しました。最後はご近所の、ワニを祀っている鰐河神社に奉納させていただきました」



店舗でのラッピング用品としてだけでなく日常生活でもmtを愛用してくださっているという十川さん。2024年3月に複合商業施設「麦縄の里」内にオープンした新店舗「あなた」では、mtを使った専用のラッピングルームを設置され、人気を博しています。

「提供してくださったmtのヘタやワックスペーパーの端材のほか、新しいテープも置いています。また、海外へ買い付けに行った際にもらってきたカタログや美術館の館内マップなども素材として再利用しています。

お子さんも楽しんでくれていて、夢中にな

るあまり1時間くらい出てこない子もいるんです(笑)。みんなが誰かのことを考えながら手を動かしている空間には、とても贅沢で幸せな空気が流れているように感じますね。

お店を始めて2024年で20年が経ちました。子ども服を扱っていることもあり、オープン時に生まれた子が20歳になったのだと思うと感慨深いものがあります。今の20代の方って、いい意味で執着がなかったり、生き方が軽やかだったり、いいと思ったものをすっと取り入れるような素直さがあって僕自身も学ばせてもらうことが多いです。アップサイクルの取り組みも、環境という枠にとらわれず、より自然でカジュアルな形で発信していけたらと思っています」

ファッションと同じように、包むという行為や空間にもストーリーを見出し、訪れる方の多様な価値観や感性を育む取り組みをされている十川さん。今後も、子どもたちと歩む道の、彩りの一つとしてmtが少しでもお役に立てたら嬉しいです。



mt × shop wrapping

紙と粘着でショップラッピングをもっと表現豊かに

好きな色を選ぶ楽しさと、
蓋を開ける喜び。
わっぱを留める
小さな引き立て役。

09.

タケノとおはぎ
小川寛貴さん

東京・桜新町などで人気を呼んでいるおはぎ専門店、タケノとおはぎ。ここでは、おはぎを詰めたわっぱの蓋を留めるために、mtのマスキングテープが使われています。おいしいおはぎを求めて訪れるお客さまたちにとのように喜ばれているのでしょうか。



タケノとおはぎは、代表の小川さんが2016年にオープンしたおはぎ専門店。東京・世田谷の桜新町にある本町本店のほか、表参道店、学芸大学店の3店舗を構える人気のお店です。そもその始まりは、小川さんが大好きだった祖母・直井タケノさんが作るおはぎだったそうです。

「小さい頃から、祖母が作ってくれるおはぎが大好きだったんです。この先食べられなくなってしまうのは嫌だと思い、お店を始めました。店名は祖母の名前からとっています」

定番商品はこし餡とつぶ餡のおはぎ。タケノさんから受け継いだ、昔から変わらない味を守り続けています。また日替わりの「変わりおはぎ」も個性たっぷり、たとえば春には「よもぎと抹茶」、夏には「黒糖パイナップルとアールグレイ」、秋には「カボチャと紫芋」、冬には「苺と甘酒」……と、さまざまな食材を組み合わせた、魅力的なおはぎがそろいます。変わりおはぎは日替わりで5種類ずつ店頭に並ぶので、まさに「一期一会」を楽しめるのだそうです。

「店を始めるにあたって、3個、5個、7個のおはぎをお買い上げのお客さまには、無料でわっぱに入れてお渡しできたらいいなと考えていました。わっぱの蓋をどうやって留めようか迷っていたところ、文房具の好きなスタッフが『mtのマスキングテープで留めてみては?』と提案してくれたんです。いまは店頭で7種類のマスキングテープを用意して、お客さまに好きなデザインを選んでいただいております」

ごくシンプルなわっぱの蓋の中央に1本のマスキングテープを貼るだけで、さらにおしゃれな見た目に。木のぬくもりを感じるわっぱと、和紙の質感をもつマスキングテープの相性もぴったりです。

毎日たくさんの予約が入り、行列もできる人気店のタケノとおはぎ。日々多くのお客さまをお迎えしている小川さんたちは、mtのマスキングテープを使いながらどんなことを感じているのでしょうか。

「おはぎだけでなくマスキングテープも自分好みに選んでいただけることや、たとえばお土産用なら、お渡しする方の好きな色やイメージなどでお選びいただく楽しさもあり、お客さまにはとても喜んでいただいています」

また使い勝手のよさについては、こんなふうに語ってくれました。

「mtのマスキングテープは定番のデザインから季節を感じるものまで、デザインの種類が豊富ですし、貼る・剥

がすテープとしての質の高さを感じますね。わっぱの蓋をしっかりと留めつつ、さらにお客さまの開けやすさも考えると、やっぱりmtのマスキングテープが一番なんです」

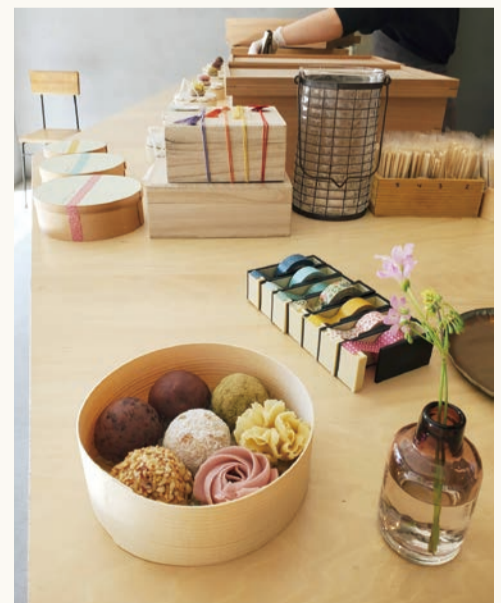
おはぎの詰まったわっぱの蓋を開けるときの、最高にワクワクする瞬間。カラフルで美しいおはぎと、それを食べるお客さんの嬉しい気持ちの引き立て役として、mtのマスキングテープは今日も活躍しています。

【タケノとおはぎ】

<https://www.takenotoohagi.com/>



古い金庫に入ったマスキングテープのコレクションから毎日7種類を店頭で用意し、お客さまが好きな色や柄を選べるようにしています。



食べるのが惜しくなりそうな美しいおはぎ。モダンな和の雰囲気醸すわっぱとmtのマスキングテープの相性も抜群です。

コーヒー豆のラベリングや商品の袋止めに。
「猿田彦珈琲」のコーポレートカラーに近い、
マットスモーキーミント色がお気に入り。

10. 猿田彦珈琲 山本知佳さん

「たった一杯で幸せになるコーヒー屋」をコンセプトに掲げるスペシャルティコーヒー専門店、猿田彦珈琲。2011年、東京・恵比寿で開店した際はドリップコーヒーの飲める小さなお店でしたが、その2年後には自家焙煎を開始、さらに焙煎併設店舗なども展開しながら人気店へと成長。現在は国内各地で20を超える店舗を展開し、自社で産地と直接取引しながらコーヒー原料である生豆の調達をおこない、高品質で風味豊かなコーヒーを追求し、届け続けています。

お客さま一人ひとりが好みの味と出会えるよう、猿田彦珈琲では豆の産地やブレンド方法、深煎りや浅煎りといったロースト加減など、さまざまな種類のコーヒーをそろえています。膨大な種類と量のコーヒー豆を管理、販売する各店舗において、陰ながら役立てられているのが、mtのマスキングテープ。どのようなシーンで使われているのか、猿田彦珈琲・コーヒーグループ部の山本さんに詳細をおうかがいしました。

「コーヒー豆等の期限管理をするため、マスキングテープを容器に貼り、そこに日付や名称を記載しています。また在庫管理をするために、棚などに商品名を書いたマスキングテープを貼ったり、販売している商品の袋止め用として使用している店舗もあります。使用時に場所を取らず、管理もしやすいので重宝しています」

一度貼っても、後できれいに剥がせる——この「粘着具合」のちょうど良さも長所として活かされているようです。

「容器洗浄の際にも簡単に剥がしやすいですし、剥がしたときにも跡が残らず、扱いやすいのでいつも助かっています」

味やホスピタリティだけでなく、洗練されたデザインも猿田彦珈琲の特徴です。漢字を

「たった一杯で幸せになるコーヒー屋」をコンセプトに掲げるスペシャルティコーヒー専門店、猿田彦珈琲。2011年、東京・恵比寿で開店した際はドリップコーヒーの飲める小さなお店でしたが、その2年後には自家焙煎を開始、さらに焙煎併設店舗なども展開しながら人気店へと成長。現在は国内各地で20を超える店舗を展開し、自社で産地と直接取引



活かしたクラシカルなロゴ、スタイリッシュでおしゃれなパッケージなどからも、コーヒータイムがさらに楽しく幸せな時間になるように……というブランドの思いを感じることができます。中でも大切にしている要素のひとつが、淡い色合いが素敵なシグネチャーカラー「猿田彦ブルー」です。

「mtのマスキングテープはさまざまなカラー展開があるのも魅力だなと思います。以前はマットホワイトを使っていたのですが、最近では『猿田彦ブルー』の色合いに近いマットスモーキーミントを使用するようになりました。細かなところにまで猿田彦珈琲らしさを取り入れることができるのは、嬉しいポイントだと感じています」

無地のものだけでも全77色のカラーバリエーションがあるmtのマスキングテープ。今後も、実用性はもちろん豊富な商品ラインナップにおいても、さまざまなご要望にお応えしていきます。



【猿田彦珈琲】

<https://sarutahiko.jp/>

@ <https://www.instagram.com/sarutahikocoffee>

パン販売の作業効率がアップ！ 「リーガロイヤルホテル」で力を発揮する 太芯・強粘着タイプのマスキングテープ。

大阪の中心部・中之島の西に建つ歴史あるホテル「リーガロイヤルホテル」。その1階に店を構えるのが、「ホテルの味をご家庭に」をコンセプトにしたおいしい食品・食材のテイクアウトショップ「グルメブティック メリッサ」です。

店内には、厳選した素材を使いホテルのレストランで作られるお総菜や、パティシエが作るケーキ、プーランジェが焼くパン、スモーク製品、世界のワインなど約300種類もの商品が並び、賑やかなマルシェのよう。ホテルを訪れたときのお土産としてはもちろん、宿泊しなくても上質なホテルの味を持ち帰れるとあって、観光客から地元の人まで幅広く愛されています。

中でも人気の商品が、毎朝焼いているさまざまな種類のパン。定番のあんパンやクロワッサン、一番人気のミルクフランスなど、約50種類が常時お店に並びます。こうしたパンをお客さまが購入した際に使われているのが、mtのマスキングテープなのだそう。どのように役立っているのか、マネージャーの平野さんにお聞きしました。

「当店は販売員がレジで梱包までをおこなう店舗ですので、商品のお渡しまでに多少のお時間がかかります。パンを入れたビニール袋の口を閉じる際に、以前は針金のタイ（結束材）を使っていたのですが、レジでの作業効率化を図り、マスキングテープに変更しました」

店舗では現在、セロハンテープカッターに設置して使用できるよう芯を太くした「mt large core(太芯)」の「強粘着タイプ」が使われています。

「以前より簡単にパン袋を留めることができるようになり、レジでの作業時間も短縮されました。また粘着力の高いマスキングテープなので、留めやすく、はがれにくいので安心感もあります」

食パンやコロンネ、クロワッサンなどかわいいパンのイラストと「Merci(ありがとう)」の文字が並ぶ温かみのあるデザインも、店頭で喜ばれているようです。

11. リーガロイヤルホテル グルメブティック メリッサ 平野 太郎さん



「はじめは無地のデザインを使用していたのですが、パンのイラストが入ったタイプに変更したところ好評で、お客さまからも『かわいらしい』とのお声をいただきました。使用しているパン袋とも、とてもマッチしていると思います。今後はお店のロゴ入りのマスキングテープなども検討していきたいです」

1935年創業のリーガロイヤルホテルと、1923年創業のカモ井加工紙。お客さまに長く愛され続ける企業として、これからも力を合わせ、よりよいサービスをお届けできるよう尽力してまいりたいと思います。



【リーガロイヤルホテル グルメブティック メリッサ】

<https://www.rihga.co.jp/osaka/melissa/>



カモ井加工紙株式会社
〒710-8611 岡山県倉敷市片島町236
TEL:086-465-5800
FAX:086-465-5860
E-mail:contact@masking-tape.jp

www.masking-tape.jp



mt
masking tape